鴻 koh

月刊俳句誌

令和5年9月1日発行
（毎月1回1日発行）
第18巻第9号　通巻207号

9月号

2023

草蜉蝣

主宰作品

増成栗人

詩よ生れよ草蜉蝣の飛ぶ水辺

炎天となり考へる葦となる

麦秋の里に一羽のこふのとり

野を深く来てあの声は瑠璃鶲

六月晦日白詰草に雨の粒

鰻屋の満席となる半夏生

水母ゆらりゆらり遠くのヨットの帆

虹二重大仏の背のまろくなる

朝顔の行灯仕立持ち戻る

どぜう鍋四万六千日の宵

罌粟坊主つんつんと日の長くなる

自在とは淋しきものよ葭雀

きちきち飛蛙とんで鴻司の忌のことを

時計草

副主宰作品

谷口摩耶

地下道を抜け正面に雲の峰

凌霄の散り積む傍を通り過ぐ

日傘たよりに三十五度の空の下

旅ごころを誘ふがごとし雲の峰

山百合の花粉にシャツを汚されて

街外れのカフェの入口時計草

味噌つけて胡瓜スティック齧りけり

汗ばみて朗読の子のはにかめる

ブルーベリー摘む蚊遣香漂はせ

寂しさを抱へ花火の果てにけり

時計草をご存じですか。私は三十年以上前に市川市内を吟行していた時に初めて見ましたが、本当に時計の文字盤そっくりで驚きました。自然界にこのような花があるなんて……。

時計草はブラジル原産で茎は蔓状の低木。古くは享保年間に長崎に伝わって来た、とあります。学問を目指す人から、その後、徐々に伝わって行ったのでしょう。江戸時代の鎖国の頃の人々の西洋への憧れを感じます。

作品抄

同人選

夏つばめ谷津田に空の下りてくる　井上つぐみ

タクシーの出払つてゐる島の夏　足立枝里

素戔嗚尊の美男におはす杜若　伊藤啓泉

焼き立てのバゲット香る夏の朝　北城美佐

なづなはこべら人それぞれの志　西條弘子

髪少し明るく染めて更衣　田部富仁子

老鶯や予定なき日のカツサンド　鈴木崇

梅雨の隙羊が点となる牧場　藤源明美

身ほとりを簡素に母の日の夕べ　山崎正子

五月雨や書肆に長居をしてしまふ　水谷はや子

草を刈る修道院の勝手口　神野未友紀

増成栗人　選

会員選

いつぽんの杭となりきる鵜が一羽　石垣真理子

沙羅の雨母の香の文束ねては　横尾かんな

柿の花わさわさと落ち信長忌　畑田久美子

泰山木の花よ鴻司の空へ散れ　待場陶火

海見むと遠回りする薄暑かな　山田ゆきこ

母の日の色とりどりのメロンパン　長沢ひろり

長男に背丈を抜かれ青嵐　中川幸恵

帰路もまた牧のアイスクリーム食ぶ　蘭さと子

梅雨空や叱られてゐる隣の子　針谷忠郎

谷口摩耶　選

「月」特集

月光が降る藤村の墓へ降る　栗人

「月」は地球の唯一の衛星である。自転しつつ、約一ケ月で地球を一周することから時間の単位としても使用され、この単位をもとに一年は十二か月に分けられている。また、地球の自転と公転の周期がほぼ等しいので、月は常に球体の半分だけを地球に向けている。太陽に対する位置の関係によって、新月・上弦・満月・下弦の位相現象を生ずる。

我が国では古来、「花鳥風月」「雪月花」などと日本人の美意識を象徴するものの一つとされ、特に「秋の月」が賞美されている。

俳句に詠まれた月

荒井一代

笠島はいづこさ月のぬかり道　芭蕉
涼しさやほの三か月の羽黒山
雲の峰幾つ崩て月の山
一家に遊女もねたり萩と月
月清し遊行のもてる砂の上
名月や北国日和定なき

『おくのほそ道』五十句より月の句を。

青い惑星地球の現代は街の明りはどんどん高くなり、電気のない時代に日が沈めば辺りは闇に包まれる不安など想像しがたい。月の満ち欠けと共に旅があり芭蕉の足跡として数多くの月の句を見ることができる。

われをつれて我影帰る月夜かな　素堂
名月や畳の上に松の影　其角
名月をとつてくれろと泣く子かな　一茶
森を出て花嫁来るよ月の道　川端茅舎
帯ゆるく締めて故郷居待月　鈴木真砂女
月代も淋しき寝待月なりし　高濱年尾

古来より暮らしは月とともにあり月を仰いでは繊細で情緒豊かに詩心をふくらませてくれる。美しい言葉として月の出を待つ心、一夜一夜月に寄せる古人の心が傍題も含め季語の豊かさに繋がっているものと感じる。

紺緋春月重く出でしかな　飯田龍太
外にも出よ触るるばかりに春の月　中村汀女
夜桜やうらわかき月本郷に　石田波郷
花影婆娑と踏むべくありぬ岨の月　原　石鼎

花を愛で月を愛でる春の朧夜は、やはり外に出て。

月齢は十三雁の帰るころ　増成栗人
生は別死も別されど梅雨月夜
草蜉蝣昼月淡く山の端に　〃
青瓢月が洗うてゆきにけり
会者定離十六夜の月青ければ

主宰の句集『逍遥』『草蜉蝣』より月の句を。

かつて三ヶ根山頂で茜色の西の空と東からは丁度十三夜の月が上る情景に出合えたのは第六回大会前日。創刊十七周年の今秋どんな月の下で集えるだろうか。

俳誌のサロン

「月」――特集　月の一句

「月」を詠んだ自分の俳句、または「月」が詠まれた愛誦の句と、その句についてのエピソードや、俳句のなかでの「月」について語っていただきました。

月光にいのち死にゆくひとと寝る　橋本多佳子

畑田久美子

月の光が差し込む窓辺、広い縁側越しのガラス戸、月は煌々と照らしてくれているのです。「いのち死にゆくひと」とは、この表現に驚きます。静かな美しい時間です。

第一句集『海燕』に掲載の一句。昭和十五年に師の山口誓子が書いた序文には、「女流作家には二つの道がある。女の道と男の道である。橋本多佳子は、男の道を行く稀な女流作家の一人である」と。

病いの主人を看取っている一刻一刻を大事にしている様子が静かに伝わってきます。側にいてくれるだけで安心している主人の穏やかさ。二人を月が静かに照らし見守ってくれているのです。これは「男の道」と師が言われた、厳しい道を選んだ人の俳句なのだと思います。

鎖あけて月さし入よ浮み堂　芭蕉

横尾かんな

琵琶湖はまだ一度も訪れたことはありませんが、ふるさと浜名湖と重なり、万葉の時代から詠まれている「近江の湖」の俳句を折につけ親しんできました。

芭蕉の句を深く読み込むことはできませんが、月光に思いを馳せた一句としていつの頃かこの句を暗誦しました。

広辞苑によれば浮御堂は臨済宗の仏堂、満月寺ともいい千体仏が安置されているとある。

固く錠を下した浮御堂の一扉を開けあの月光をさし入れ千体仏を照らし出せ、と祈りにも似た思いで願ったことでしょう。

「月さし入よ」から子供の頃のことがふと思い出されました。ある夜のこと月光に照らし出された青白く輝く庭、室内は明りを消し部屋の隅々まで照らし出された幻想的な光景、家族と共に月光を楽しんだことは忘れることのできない一生の思い出となっています。

外にも出よ触るるばかりに春の月　中村汀女

水沢和世

山本健吉の掲句を語る一文に、「目の覚めるばかりの明るい抒情的作品であり、直截でで大胆な叙法であり、大きな明るい春の月を見出だしたときの驚きが、よく現われている」と記されている。台所俳句とけなされた女流俳人の時代に、未だ色褪せない斬新な掲句を発表したのだ。臨場感ある句に改めて感動。そして、不肖の弟子の私は、今頃になり向上心が芽生えた。中年になっての汀女は、女帝などと言われているが、しかし、カリスマ的且つアイドル的存在感は凄い。その事に纏わるエピソードは、或る講座で、二人の若い女性が、毎回一番前の席を陣取り、汀女の一挙一動を見つめていたのだ。後に、側近に「あの方たちは気持が悪いわ」ともらしたと聞き、笑ってしまったが、然もあろうと頷いてしまった。それほど「風花」の会員にとって、憧れの師であった。

月の人のひとりとならむ車椅子　角川源義

西條弘子

「河」の創始者、角川源義の最晩年の作品である。昭和五十年作とあり、この年の八月十五日に東京女子医大病院に入院、本人には知らされぬ肝臓癌であった。この病気は腹水が増量することで知られている。三度の腹水を抜いた苦しみを「腹水みたび脱きて糸瓜忌近きかな」の句を生み、標題の句のその後の作である。

昭和四十四年に人類で初めてアポロ十一号が月面に着陸した。世の中はその快挙に宇宙への夢をますます大きくしていった。

「この句から受けるイメージは、車椅子に乗っておられる氏が、車椅子ごと月に向って上って行きつつある童画的なものである」と山本健吉氏も月世界へ上りたい願望説を支持した」と脚注にある。

氏は月の人となって「河」も「鴻」も見守っているに違いない。

「後の月雨に終るや足まくら」絶句。

月山を霧の向うに鐘を撞く　谷口摩耶

森多　歩

第一句集『鍵盤』より

頂上に月山神社を置く月山は、清浄で崇高な存在です。掲句は、大きな景を正面に置き〈鐘を撞く〉というだけの簡潔な表出で思いを強く伝えているのです。

前後の作品から摩耶さんご自身の病気のこと、お嬢さんの進学のこと、ご家族のこと等気遣いが増えたことが窺えます。

鐘を撞いて何を祈ったのでしょう。近年であれば、コロナ禍の終患、世界平和、震災がありませんように、「鴻」の皆様の健康等々でしょうか。

私は寝る前のひととき、ベランダに出て空を見る習慣があります。今日の無事に感謝をして、明日の子供達の幸せを祈ります。白内障の手術の後、月が三つに見え一寸得をしていると思っている昨今です。

帰り来ぬ人へ開けおく月の窓　摩耶

ちょっとそこまで 第52回

「春日・猫ビル詣で」

鈴木　崇

ある日、台東区谷中を歩いていると、ちょうどいい児童公園規模の広場があった。小さな落ち着く場所だなと思い、園内に入ると、奥に存在感のある六角堂が建っている。

ここは岡倉天心記念公園。天心の旧居跡で、日本美術院が開設された地なのだった。六角堂内には平櫛田中作の「岡倉天心胸像」が安置されている。

安置、と常套句をオートマチックに記してしまったが、胸像の衷構はふてぶてしい迫力に満ち、全然安んじていない。多くの天心像やポートレイトにも同じように、不遜な、荒ぶった気配を濃厚に感じる。天心という人物の過剰さは明治人の中でもかなり異色だ。

岡倉天心は文久二年横浜に生まれた。天心は雅号で、本名は覚三。代表作は『茶の本THE BOOK OF TEA』著作はすべて英文で書かれている。活動は多岐にわたり、高階秀爾日く「彼は同時に思想家であり、教育者であり、行政官であり、美術史家であり、批評家でり、芸術運動の組織者であり、美術館の管理者であり、しかもそれらのいずれの枠からもはみ出してしまう存在であったし。彼の桁違いのスケールが窺える。

国際人であった天心は、海外でも羽織袴で通した。天心胸像も、ちょっと変わった服装をしている。これは東京美術学校時代に天心が定めた制服で、「美術は奈良朝から学ぶべき」との考えから奈良時代の朝廷で文官が着た服装を復活させたもの。天心はこの制服で馬に乗って学校へ通ったという。

二〇二二年夏に茨城を旅し、五浦へ立ち寄った。

五浦は谷中から日本美術院を移転した、天心ゆかりの地である。旧天心邸・六角堂・長屋門は「天心遺跡」として有料公開されている白五浦海岸の岩場を望むこちらの六角堂を模して、公園の六角堂は建てられていたのだ。

春潮の音のひしめく六角堂　星野恒彦

六角堂は、波の浸食で洗われた硬い岩盤の岬に立っている。六魚堂の北と南で地形と地層の様子が異なり、崖面の模様など自然の造形美を観察できる。海に突出する奇岩の正体は炭酸塩コンクリーション、いわば〝天然のコンクリート〟である。さすが天心、絶好のビューポイントに建てたものだ。

天心はこの海岸で自ら設計した釣船に乗り、釣りを楽しんだ。仕官を断り釣りなどをして隠士で一生を終えたという後漢の人物・厳子陵に扮した天心の写真が残っており、この姿をもとに制作された田中作の「五浦釣人像」が記念館に展示されていた。

奈良朝の制服といい後漢の隠士といい、天心のコスプレ趣味ガチ勢ぶりに気圧される。

日　猫ビル

羽音集

谷口摩耶　選

街路樹に北のソーラン爆ぜて夏　小樽　山田ゆきこ

海見むと遠回りする薄暑かな

水無月の父と息子は寡黙なりし

雲の峰運河に集ふ写生会

紫陽花の薄むらさきにある愁ひ

校門を囲む万緑晶子の忌　流山　長沢ひろり

雨粒の光集めよ花水木

大仏の半眼涼し鎌倉路

母の日の色とりどりのメロンパン

新緑やけんけん遊びの子が二人

じんわりと親不知歯病み梅雨に入る　会津　中川　幸恵

初勝利筍飯を山盛りに

種芋を忘れてをれば芽の出でて

弁当の注文多き遠足児

長男に背丈を抜かれ青嵐

お日様の甘み飲み干す新茶かな

帰路もまた牧のアイスクリーム食ぶ　札幌　蘭さと子

ティーカップの漂白をしてけふは夏至

ドレミの歌聞こえてきさうソーダ水

ひとつまみ先づ噛んでみる新茶かな

栗庵閑話 63

虫丸

http://www.haisi.com/koh/index.htm